

「第2期美瑛町まち・ひと・しごと創生総合戦略」

美瑛町まちづくり推進課

1 はじめに

美瑛町は、北海道のほぼ中央に位置し、十勝岳連峰の山麓に広がる人口約1万人のまちです。東京23区とほぼ同じ676.78km²の広大な面積を有し、河川流域に沿って放射線状に形成された集落では、農業に不向きと言われる丘陵地形にも関わらず、十勝岳連峰の雪どけ水や昼夜の寒暖差など恵まれた条件を活かして、米、小麦、ばれいしょ、アスパラ、トマト、豆類といった多彩な農産物の生産活動が営まれています。

町独自の認定基準により厳選された「ビエイティフル商品」には、素材とれたての美味しさをとじこめた「フリーズドライ食品」をはじめ、この豊富な農畜産物を加工して生まれた特産品が顔をそろえるなど、農業を軸に副次的な産業も発展しています。

また、2,000m級の山々を背景にどこまでも波のように続く丘陵地帯は、季節が進むにつれて多様な作物が様々な色に変化するため「パッチワークの丘」とも呼ばれ、農業の営みが創り出すこの美しい農業景観を求めて多くの観光客が訪れています。

近年では、十勝岳の火山活動から地域を守るために整備された砂防施設の一部が「青い池」として認知されるとともに、令和4年1月には十勝岳ジオパーク美瑛・上富良野エリアが日本ジオパークに認定されるなど、国内有数の観光地として今も成長し続けています。



十勝岳連峰と美瑛の丘陵景観

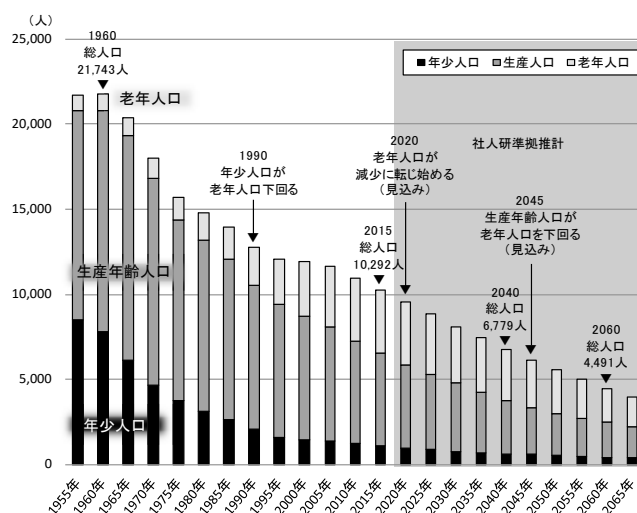
2 第2期美瑛町人口ビジョンの概要について

美瑛町の総人口は、1960（昭和35）年の人口21,743人をピークに減少し続けており、2015（平成27）年時点では10,292人となっています。国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口（平成30（2018）年推計）」に準拠した推計（以下、「社人研準拠推計」という。）によると、2040（令和22）年には6,779人、2060（令和42）年には4,491人となる見込みです。

人口推移を年齢3区分別にみると、生産年齢人口（15歳以上65歳未満）は、1965（昭和40）年に13,163人とピークを迎え、その後は減少に転じています。年少人口（15歳未満）も減少し続けており、1990（平成2）年には老年人口を下回っています。

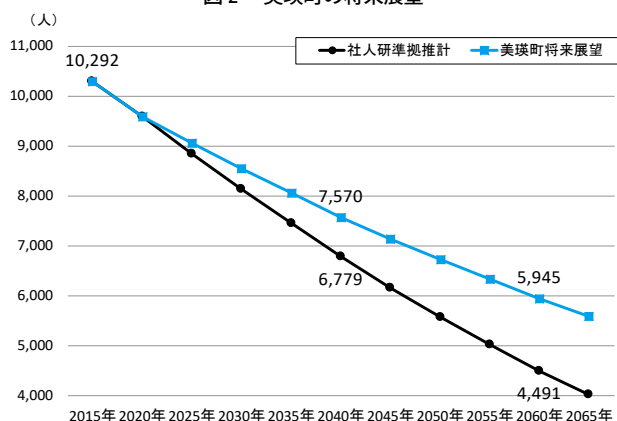
なお、老年人口は増加し続けており、2015（平成27）年の3,736人をピークに減少へ転じると推計されていますが、2045（令和27）年には、生産年齢人口を逆転すると見込まれています。

図1 総人口及び年齢3区分別人口の推移（1955年～2065年）



（出典）2015年までは「国勢調査」、2020年以降は「日本の地域別将来推計人口（平成30（2018）年推計）」（国立社会保障・人口問題研究所）に基づき作成

図2 美瑛町の将来展望



【社会移動の仮定】 20～24歳、25～29歳、30～34歳、35～39歳、40～44歳、45～49歳、50～54歳、55～59歳、60～64歳の男女が5年間でそれぞれ2名ずつ増加していく

(出典) 国提供資料より作成

これらの人口減少課題への対策に関して、「美瑛町まち・ひと・しごと創生総合戦略」（以下、「総合戦略」という。）に基づき、効果的な施策を展開することで、合計特殊出生率について社人研準拠推計と同様の水準（約1.48）となり、社会移動について2025（令和7）年以降、20～64歳の男女が増加していくと仮定して将来展望を推計した結果、2040（令和22）年時点の人口は7,570人、2060（令和42）年時点の人口は5,945人になると推計されています。

3 第2期美瑛町まち・ひと・しごと創生総合戦略の概要について

【これまでの経過と背景】

美瑛町では2015（平成27）年に2019（平成31）年までの5年を計画期間とする総合戦略を策定し、『世界を舞台に「丘のまちびえい」の創造と発信』を基本方向として、将来にわたり安心して子育てができる環境の充実や、地域産業の活性化により新たな雇用の場の創出を目指すなど、4つの戦略に基づき施策を展開してきました。

第2期総合戦略では、地方創生に向けた取り組みの継続を力にし、より一層の充実・強化が求められていることから、人口減少の状況を直視しつつ、時代の潮流を捉えながら、誰もが住みたいと思える新しい「丘

のまちびえい」の創造に向け、2020（令和2）年から2024（令和6）年までの5年を計画期間として、本町における地方創生を実現すべく取り組んでいるところです。

【持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた施策の推進】

本戦略では、人口減少と地域経済縮小を克服し、まち・ひと・しごとの創生と好循環の確立によって、将来にわたり安心して暮らし続けることのできるまちづくりを目指しており、SDGsの理念と合致する施策を推進するものです。

令和4年度には、本町が策定するあらゆる構想や計画の最上位に位置づけられる「美瑛町まちづくり総合計画」の全面改訂も予定しておりますが、まちが進むべき方向性と、それに向けて実施すべき施策を体系的に示すための策定過程においても、SDGsの理念に基づいた取り組みを実践するなど、持続可能なまちづくりを推進しています。

【基本方向と基本目標（4つの戦略）】

人口減少にかかる課題を克服し、将来にわたって活力ある地域社会を維持するとともに、町民が幸せに暮らせるまちを目指すため、『誰もが住みたい「丘のまちびえい」の創造～地域資源がひと・しごとを呼び込む循環づくり～』を掲げた基本方向に基づき、戦略を推進しています。

さらに、基本方向の実現に向けて、4つの戦略に基づき施策を展開するとともに、戦略ごとに美瑛町の特

図3 第2期美瑛町まち・ひと・しごと創生総合戦略の体系



色や地域資源をいかし、住民に身近でより具体的な施策を幅広く実施しています。

【戦略1】地域産業の活性化により雇用の場を生み出す

美瑛町の基幹産業である農業の継続的な発展と、豊かな自然環境や農村景観などの地域資源をいかした観光業を柱に据えて、安定した雇用の創出を図ります。農業と観光業の連携による相乗効果で、町内産業の一層の活性化を図り、地域の情報や魅力を広く発信する体制を整え、町外企業や大学との連携を推進し、産業基盤の強化と雇用の拡大につなげます。

【戦略2】「丘のまちびえい」に新たな人の流れをつくる

「丘のまちびえい」の美しい農村景観は貴重な財産であり、その景観を求めて国内外より毎年多くの観光客が訪れるなど、まちの魅力として注目されています。一方で、夏季に観光客が集中する「季節型観光」や滞在時間が短い「通過型観光」などの観光現象が顕著に表れており、多様化する旅行ニーズに応えるべく受入体制の強化を図るとともに、継続的かつ多様な形でまちに関わる「関係人口」の創出・拡大を目指します。

これまでの移住・定住対策における取り組み内容や他自治体の成功事例等からその可能性を探り、町内への人材還流を高める施策として、企業連携、地域教育、体験観光など「関係人口」に関する様々な取り組みを加速化させます。

【戦略3】将来にわたって安心して子育てができる環境づくり

子育て世代が美瑛町に住みたいと思えるよう、安心して子どもを産み育てられる環境づくりを推進します。若者が仕事を心得て活躍の場を広げることのできる社会になるよう、地域ぐるみで支援するとともに、子育てを楽しむことのできる空間づくりなど、総合的な子育て支援に取り組みます。

また、子どもたちの健やかな成長と豊かな心を育み、一人一人の成長にあった多様で柔軟な教育活動の推進により、望ましい教育環境の充実・整備を図ります。

【戦略4】地域と地域の連携により住民の暮らしを守り、美瑛の魅力を発信する

近年、地震や大雨などの自然災害が多発し、地域住民の生活を脅かすリスクが増してきており、安心して暮らせるまちを実現するためには、自助・共助・公助による災害に強いまちづくりを推進するとともに、全ての地域において必要とされる生活サービスの安定した提供と、美瑛町に住む人々が今の生活やまちの魅力に誇りを持つことが大切です。

地域課題の解決や町民サービスの向上につながる提案を積極的に取り入れ、「みんなでつくる」まちづくりの実現に向けて、行政と町民が一体となった町民参加型のまちづくりを推進します。

また、地域と地域の連携による持続可能なまちを目指して、自治体間の広域連携による地域社会の形成、首都圏企業や大学等との連携による地域活性化や情報発信、文化やスポーツ等を通じた交流による地域振興を進めます。

4 取り組み事例の紹介

【電子地域通貨「Beコイン」の導入】

美瑛町では、地域経済の活性化を図るため、平成20年からプレミアム付商品券事業を実施してきましたが、紙で発行する商品券は印刷コストが高いうえに換金や集計に膨大な時間を要するため、業務の効率化が求められていたことから、これをきっかけに様々な検討を重ねてきました。また、総合戦略の中でも、地域経済の循環によるまちづくりを掲げており、町内に循環するお金の町外への流出を抑制できる可能性もあることから、電子地域通貨「Beコイン」の導入を決めました。

導入当初は、町内で元々商品券事業を実施していた全店舗を対象としました。決済カードはICカードに比べて導入コストが抑えられるQRコード方式を採用し、決済用スマートフォンを希望する全店舗に無償貸与するとともに、コードリーダーも同様に無償貸与しています。また、幅広い年代の方々や、多くの町内事



電子地域通貨「Beコイン」

業者にも利用していただけるよう、事業者説明会や個別訪問での説明、端末利用講習会などを開催し、利用促進に努めてきました。

導入効果としては、大規模小売店舗の立地による商圏構造の変化により、町外に購買力が流失していましたが、地元商店街を中心とした町内消費の拡大につながっています。また、事務処理の煩雑さが従来からの課題であったプレミアム付商品券事業のほか、福祉灯油事業、移住者向け家賃助成事業などの各種支援事業について、1枚のカードで管理することが可能となり、事業者・利用者双方にとって多くのメリットが生まれています。さらに、デジタル化に伴う精算・管理運営コストや人的負担が大幅に軽減されたことによって、より多く町民の皆さんに還元率を高めたサービスを提供できるようになりました。

今後は、更なる利便性の向上を目指し、町役場を含む3箇所しかないチャージできる場所を増すため、コンビニエンスストアでのチャージや、クレジットカード決済による自動チャージなどの検討を進めていきます。また、商品券事業や各種支援事業だけではなく、Beコインを通じて地域の発展やコミュニティづくりを進めることにより、町民の生活の一部として成り立つような仕組みづくりを進めていきます。

【非日常を味わえる「びえいでテレワーク」の実施】

働き方が変わることで地方への関心が高まる中、美瑛町で実際に暮らしながら充実したワークライフバランスを体感していただくため、都市部から離れたまち

でも仕事ができるテレワークを推進しています。旭川空港から車で約15分と立地の良い本町では、仕事と余暇の切り替えをしながら、効率よく普段の仕事をテレワークで実践することができます。

この事業は令和2年度から開始し、当初はHome Office 1棟を用意して、テレワーカーの受け入れを行っていましたが、予想を上回るご利用をいただくなど大変好評だったことから、令和3年度に国の補助金を活用して、Home Office 2号棟を整備しました。施設をご利用いただく際のルールとしては、ひと月単位での利用が基本となり、最大2カ月間の利用が可能です。テレワークを実施している企業（社員）もしくは個人事業主の方や、共通する仕事仲間でのプロジェクトの遂行など、複数人での利用も可能です。また、スペシャルサポートとして施設使用料の2分の1を助成しており、その一部は、前述したBeコインで助成する仕組みを導入しています。これにより、町内での買い物を楽しんでいただくとともに、商店街の活性化にもつながっています。ご利用いただいた方からは、「キャンプ道具やロードバイクなど、もっと遊び道具を持ってきておけばよかった」とのお声をお聞きすることもあり、非日常での楽しみがあることで、仕事への集中力も変わるようです。

この事業を通じて、自然豊かな美瑛町での生活を体験していただくのと同時に、継続的にまちと関わっていただくことで、交流人口でも定住人口でもない「関係人口の創出・拡大」を図ることも目的としています。美しい農村景観、そして豊富な農畜産物から生まれる「食」が魅力の本町で、これからも多くの方々との関わりを持つことができる「場」を提供していきます。



自然豊かな場所でテレワーク

【幻のアスパラ「ラスノーブル」 苗復活事業】

美瑛町の農業が創り出す美しい丘陵景観は「丘のまちびえい」と呼ばれていますが、その景観形成の主役となっているのは畑作です。そんな美瑛町はアスパラガスの産地としても有名であり、特に町の独自品種「ラスノーブル」は柔らかくて甘みが強いことが特徴で、G8北海道洞爺湖サミットのディナー用食材にも採用されました。その後もテレビをはじめ各メディアに取り上げられ、全国的に注目を浴びています。

しかし、ラスノーブルはすでに種子が消失しており、最後に植えられた苗は10年前となります。アスパラの株がもつのは10年程度ですので、このままではラスノーブルは今後数年で絶滅します。そんな危機的状況から「幻のアスパラ」と呼ばれています。

美瑛町では、ラスノーブルを存続させるため、令和2年度から『幻のアスパラ「ラスノーブル」 苗復活プロジェクト』を立ち上げました。このプロジェクトは、クローン技術を駆使して、今ある株からラスノーブルの苗を再生するという一大プロジェクトです。本町が世界に誇る極良食味アスパラガス「ラスノーブル」を次世代につなぎ、その味を皆さまにいつまでも堪能していただくために、関係機関が連携し、様々な取り組みを進めています。

ラスノーブルは、元々「フルート」というホワイトアスパラ用の品種でした。他品種より秀でた甘みと柔らかさが特徴ですが、柔らかいがゆえに曲がりやすいなど栽培が難しく、他の地域では栽培が定着しませんでした。一方、本町では、アスパラ栽培に恵まれた気候風土や培われてきた栽培技術があり、美瑛のブランドとして育てたいという思いから、美瑛独自の品種「ラスノーブル」と命名し、平成3年から栽培を始めました。その後、ラスノーブルの作付面積は拡大し、平成20年には約113haで栽培されるようになり、本町を代表する品種となりました。

そんなラスノーブルですが、種子の元となる両親の系統が消失したため、平成22年を最後に種子の供給が

終了となってしまいました。アスパラガスの株は10年程度もつため、現在もまだラスノーブルは出荷されていますが、その量は年々減少しており、今後数年で完全になってしまいます。そこで、ラスノーブルを絶滅の危機から救うべく、町とJAびえいが連携し、苗の復活プロジェクトを開始しました。クローンの培養技術を用いてラスノーブルの苗を復活するために企業とも連携し、プロジェクトを推進しています。

令和2年度から、ラスノーブルの株を存続させるための調査研究を実施し、これまでの成果として、現存する株の細胞からクローンの苗を再生することには成功しました。しかし、それはまだ実験レベルであり、コストが非常に高く（一般的な苗の20倍以上）、生産者が使えるレベルには達していません。加えて、その苗から本当にラスノーブルが収穫できるのか、苗が何年間もつのかといったことも不明です。

現在は、ラスノーブルのクローン苗の安定的かつ効率的な生産に向けた試験研究を進めるとともに、アスパラガスの栽培に適した農地を新たに取得・整備し、クローン苗の品質、収量等の栽培試験・調査を実施しています。

このプロジェクトでは、ラスノーブルの苗の復活によって美瑛町のアスパラガスの生産維持ではなく強化することで、「幻」のアスパラガスではなく、美瑛町の「特産品」として全国の皆さまに届けていくことを最終目標としています。



美瑛の独自品種であるアスパラガス「ラスノーブル」